季節を詠む、時流を詠む 四季の歌

美野里短歌クラブ

うきうきと里に帰りし嫁の顔遠い昔の吾が面影か　菱沼清子
喜びや悲しみさえもとどまらず季節はめぐり時は流るる　菱沼友江
初めてのネット通販試みて届いた服を着たり脱いだり　宇都宮和子
つぎつぎに親しき友の亡くなりてひとり庭見る春の夕暮れ　碇谷きえ
桜花茨城は今が盛りなり種類ちがえて暫し咲きつぐ　白根澤清香

小川短歌会

はつ夏の若葉の梢を吹きわたる風のそよぎよ心はずめり　石田はる江
ポストまで押し車での道遠しせめて雨だけやんでくれたら　根本智恵子
眠れねば繙く清張この度も引き込まれては眠らずに読む　幡谷啓子
分かち合うことの幸せ友よりの栗赤飯の今朝は届けり　中根良子

玉里短歌会

洗車したその日に鳴きだす雨蛙雨降るなかれせめて三日は　松田通喜
全身でここに居るよとケイタイはわれに告げたり身を震わせて　石橋吉生
強い風に倒るる庭の白樺をありがとうねといたわりて伐る　齋藤かつみ
草むらにうす紫のすみれ草見る人々の顔はやさしく　高田久子
取り来たるキャベツの外葉我が山羊は食まず残せり干からびしまま　鶴町文男

寄稿

昔より今は長生きジバーチャン　深作茂登子

みづうみ俳句会

新緑やまだ歩けそう万歩計　長島久美子
梅雨に入り卓上台の電子辞書　榎本喜代子
烽火三月ウクライナの春望　長島美奈子
しらさぎが食を求めて青田入り　長島昭
あやめ咲き嫁入り舟に幸あれと　三村れい子
初めての曾孫は男の子よ鯉のぼり（再掲）　長島久美子

みのり俳句会

昭和の日昭和生れの吾れも老ゆ　友水
かたかごやをとめらに名の有る如く　佐藤清
老えるほど母似と思ふ母の日に　島田草心
とりどりの花競ひ合ふ我が狭庭　立原千代
柿若葉雲なき空の青さかな　白根澤清香

欅の会

二階から風鈴の音の降りて来る　岡島
刈り残し薊一本天を衝く　塚田忠男
湖風をぎしぎし鳴らす行々子　村田妙子
下町の訛隠せず江戸風鈴　岡島禮子
揚ひばり破調たからか筑波晴　木村小夜子

くるみ俳句会

柿若葉隣家に流るピアノかな　小原エミ
老鶯の声に聞き惚れ散歩せり　信田菊女
トロロそば咽なめらかに通りけり　島田篁村
園庭の深きしじまや濃あじさい　城垣内睦子
混声のふるさと賛歌夏舞台　福島邦誉

たまり俳句会

雨もよい蛙の声の押し寄せる　鶴町文男
水無月や真珠色せる初蓮根　野口初江
雨の降る前に草刈り急ぎけり　長谷川光男
歌を詠む色紙に梅雨の重みかな　松田通喜
梅雨に入り暮色蒼然続く日々　矢口友子

小美玉川柳会

母つよし店一杯のカーネーション　江戸忠男
リユウグウは命と水の玉手箱　阿久津強
ウクライナ ムンクの叫び世界から　石井昭夫
若返る気持ちはあるが身が拒む　橋本昇丘
夏を待つ花火に神輿今年こそ　小林岳悠